

高齢者看護学実習における通所介護（デイサービス）1日体験の学生の学び：実習レポートの分析より（原著）

著者	田中 小百合, 太田 節子
雑誌名	滋賀医科大学看護学ジャーナル
巻	4
号	1
ページ	32-39
発行年	2006-03-15
その他の言語のタイトル	What students learned from one-day experiences at elderly day care facilities as a component of practical training for elderly nursing : analysis of day care practical training reports
URL	http://hdl.handle.net/10422/843

高齢者看護学実習における通所介護(デイサービス)1日体験の学生の学び

- 実習レポートの分析より -

田中 小百合 太田 節子

臨床看護学講座

要旨

本研究の目的は、単独一般型、一般型、認知症型の3タイプのいずれかの通所介護を1日体験した看護学生の学びを明らかにして、今後の実習に役立てることである。対象は、研究の趣旨を説明して研究協力の了解が得られた35名の学生の実習レポートである。研究方法は、質的・帰納的方法で、学生が記述した体験の学びや気づきを1文1意味のラベルとして取り出してカテゴリー化し、構造化した。

その結果、取り出されたラベルの数は237であり、共通した学びは、【高齢者特性・通所介護の特徴の理解】【利用者に適した援助の必要性・重要性】【コミュニケーション方法】【利用者に適した援助方法】【通所介護の役割】【通所介護の運営体制】【自己のふり返し】の7主カテゴリーであり、各カテゴリーに2から15項目のサブカテゴリーが認められた。利用者の送迎場面において、学生は家族の介護負担軽減に貢献する通所介護の役割と意義を学びとっていた。

キーワード：通所介護(デイサービス)、実習レポート、要介護度、学生の学び

はじめに

老人看護学実習に関する先行研究¹⁻⁴⁾は数多くみられるが、実習期間や実習場所などに多様さがみられる。本学の老人看護学実習は、病院における高齢者看護実習に引き続き、介護老人福祉施設(以下、施設とする)実習を行っている。通所介護実習は、学生が地域の様々な健康レベルの高齢者と出会う機会となるため、本学では施設実習期間中に1日間の通所介護実習を組み入れてきた。しかし、介護老人福祉施設や通所介護での実習体験を取り上げて、学生の学びを構造化した研究⁵⁻⁷⁾はまだない。したがって、今回の通所介護実習のみに着目して学生の学びを分析したいと考えた。

研究目的

本研究の目的は、学生が通所介護実習において、どのような体験や学びがあったのかを明らかにして、構造化し、今後の実習計画立案に役立てることである。

実習の概要

1. 看護学実習の概要

看護学実習は、1年前期の基礎看護学実習(1単位)と2年後期の基礎看護学実習(2単位)の後、3年後期から4年前期に渡って成人看護学実習(6単位)、老人看護学実習(2単位)、小児看護学実習(3単位)、母性看護学実習(3単位)、精神看護学実習(2単位)と地域看護学実習(3単位)を順不同のローテーションで実施されている。

2. 老人看護学実習

1) 実習の目的と実習施設

老人看護学実習の目的は“学内で学んだ知識・技術を統合し、高齢者への看護の実践を通して基礎的臨床能力を身につける”であり、実習施設は病院における実習(1週間)と施設実習(1週間)である。

2) 通所介護実習の概要

通所介護の実習は施設実習のなかの1日であり、単独型で要支援～要介護3の高齢者を中心とした通所介護施設(以下、単独一般型とする)と、介護老人福祉施設に併設している要介護3～5の身体障害者を中心とした通所介護(以下、一般型とする)と、同施設に併設している認知症高齢者を中心とした通所介護(以下、認知症型とする)の3タイプのうち、いずれか1つの通所介護で体験をしている。学生の体験する通所介護は、学生が主体的に選択している。

通所介護のサービス内容は、入浴及び食事の提供(これらに伴う介護を含む)、生活などに関する相談及び助言、健康状態の確認、その他の必要な日常生活上の世話、レクリエーションや体操・趣味活動などを通じた機能訓練、送迎である。

通所介護の体験の場は、他看護学生および福祉学生やボランティアの受け入れも積極的に行っており、職員の学生に対する受け入れは良い。

3) 指導体制と実習方法

(1) 指導体制

通所介護実習では、主に介護支援専門員(生活相談員)

が実習指導にあっている。大学より教員1名が実習調整と通所介護実習の説明などのオリエンテーションや間接的実習指導を行い、学生を支援する。

(2)実習方法

学生は3タイプのいずれかの通所介護で、朝から夕方の送迎まで通所介護の1日の流れにそって、必要なケアを職員に相談しながらケアを体験する。

教員は、学生が実習に取り組む姿勢として、多くの高齢者と関わること、疑問や質問は学生から職員に積極的に問いかけて解決していくようにと指導している。さらに実習記録の点検や学生支援を行っている。

実習レポートは体験したケア内容や高齢者の反応、学びなどを自由記載する様式となっている。

・研究方法

1. 研究デザイン

本研究は質的帰納的研究方法を用いた、記述的な研究デザインである。

2. 用語の操作定義

【学び】学ぶには「まねてする、ならって行く」⁸⁾という意味があるが、さらに利用者の反応や職員の対応を観察して、自ら考え、判断しながら行動して得たことを含むものとする。

【通所介護】要介護状態等となった場合でも、通所介護の利用者が可能な限り居宅において、利用者の有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるよう、必要な日常生活上の世話及び機能訓練を行うことにより、利用者の社会的孤立感の解消及び心身の機能の維持並びに利用者の家族の身体的及び精神的負担の軽減を図るサービス⁹⁾とする。

【要介護度】寝たきりや認知症などによる必要な

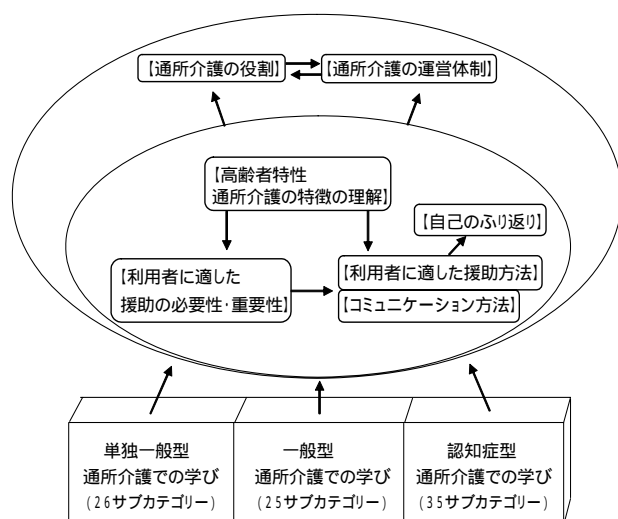


図1. 3タイプの通所介護実習における学び(サブカテゴリ)と共通の学び(主カテゴリ)の位置づけ

介護の程度や、家事や身支度など日常生活に必要な支援の程度を介護保険制度に基づき、要介護・要支援認定を行い、サービスの必要度が低い順に「要支援」「要介護1」から「要介護5」に区分した6ランク¹⁰⁾とする。

3. 対象

2004年10月~2005年2月に施設実習を終了した3年生47名のうち、本調査に協力を得た35名(74.5%)の通所介護(単独一般型11人、一般型10人、認知症型14人)の実習レポートである。

4. 倫理的配慮

施設実習を行う学生に、口頭および文書にて研究目的、方法、研究協力は任意であること、参加拒否による不利益は全くないこと、研究データの施設名、学生名は記号化し、施設や個人を特定できないようにすること、またデータは研究以外に使用せず、終了後は処理すること等を説明して承諾を得た。

5. 分析方法

実習レポートを精読し、複数の研究者間で学生の学びや気づきとして記述されている内容を1文1意味として取り出した。これらの文章を通所介護の3タイプごとに分類し、サブカテゴリを抽出した。そして、3タイプの通所介護で体験した学びの共通点を質的帰納的に分類し、主カテゴリとして抽出し、命名した。学生の学びとして取り出されたカテゴリの関係を構造化した。

・結果

1. 通所介護における学生の学び

3タイプそれぞれの通所介護体験の記録から、文章化して取り出した学生の学びは総数237件、1人あたり平均6.8件の記述であった。そこから、【利用者に適した援助方法(74件:31.2%)】【高齢者特性・通所介護の特徴の理解(48件:20.3%)】【利用者に適した援助の必要性・重要性(38件:16.0%)】【通所介護の役割(36件:15.2%)】【コミュニケーション方法(20件:8.4%)】【通所介護の運営体制(17件:7.2%)】【自己のふり返り(4件:1.7%)】の7カテゴリが取り出された(表1)。

3タイプの通所介護における学生の学び(サブカテゴリ)と、共通の学び(主カテゴリ)の位置づけを示した(図1)。

3タイプの通所介護の体験で得られた学生の学びは、単独一般型では26サブカテゴリ、一般型では25サブカテゴリ、認知症型では35サブカテゴリであった。それら3タイプの通所介護における学生の学びの共通項として、7主カテゴリの学びが分類された。

学生は通所介護利用者の入浴介助や食事介助に職員とともに関わりながら、高齢者の他者への思いやりや感謝の気持ち、通所介護の落ちついた雰囲気等の気づきを含

高齢者看護学実習における通所介護(デイサービス) 1 日体験の学生の学び

表 1 . 通所介護実習における学生の学びの分類

主カテゴリー	サブカテゴリー	単独一般型	一般型	認知症型
利用者に適した援助方法 74件(31.2%)	入浴介助(16件)	6	2	8
	レクリエーション時の介助・工夫(12件)		6	6
	雰囲気づくり(8件)		4	4
	個別性を尊重した関わり(5件)		2	3
	食事介助(5件)	2	1	1
	送迎時の介助(4件)	1		3
	自立を促す介助(4件)	4		
	見守り(3件)			4
	平等な関わり(3件)	2		1
	自尊心を高める関わり(3件)	3		
	認知症高齢者への介助(3件)			3
	移動介助(3件)	2		1
	更衣介助(2件)	1	1	
	高齢者のペースを配慮した関わり(2件)	1		1
信頼関係の構築(1件)			1	
高齢者特性・通所介護の 特徴の理解 48件(20.3%)	高齢者の特性(15件)	8	3	4
	通所介護の特徴(13件)	8	2	3
	職員の対応(7件)	2	1	4
	レクリエーション(4件)	4		
	送迎(4件)			4
	認知症高齢者の特性(3件)			3
	介護家族像(1件)			1
	現代社会像(1件)	1		
利用者に適した援助の 必要性・重要性 38件(16.0%)	自立を促す関わりの大切さ(8件)	1	3	4
	意欲・興味・誇りへの働きかけの大切さ(6件)	4	1	1
	アセスメント・観察の大切さ(6件)	2	2	2
	生活背景など個別性を活かした対応の大切さ(5件)		1	4
	在宅生活を踏まえた関わり(5件)		2	3
	高齢者の特性を踏まえたケアの大切さ(3件)	1	2	
	認知症を考慮した対応の必要性(3件)			3
	ニーズ・楽しみ・満足・充実への配慮の必要性(2件)	2		
通所介護の役割 36件(15.2%)	他者との交流・刺激の場の提供(14件)	6	3	5
	日常生活の支援(12件)	4	4	4
	介護家族の負担軽減(5件)		2	3
	外出の機会(4件)	3	1	
	複数の役割・意義の存在(1件)	1		
コミュニケーション方法 20件(8.4%)	利用者のペースにあったコミュニケーション(16件)	6	6	4
	認知症高齢者とのコミュニケーション(2件)			2
	非言語的コミュニケーション(2件)			2
通所介護の運営体制 17件(7.2%)	送迎の効果的利用(5件)			5
	職員の役割分担・配置の工夫(3件)		2	1
	利用者・家族に感謝の気持ちを伝える(3件)	2	1	
	同一職員による対応(2件)		2	
	充実した時間の提供(2件)	1	1	
	学生も職員の一員(1件)		1	
	他職種との連携(1件)			1
自己のふり返り 4件(1.7%)	確認の大切さ・再考の必要性への気づき(3件)			3
	技術の未熟さから自己を振り返る(1件)			1
合計	237件	78件(100%)	56件(100%)	103件(100%)

めて、【高齢者特性・通所介護の特徴の理解】をしていた。学生は利用者という対象や通所介護という環境理解によって、通所介護での高齢者個々人に援助する際に、アセスメントや観察する大切さ、自立を促すこと、意欲・興味などへの働きかけなどの【利用者に適した援助の必要性・重要性】を学んでいた。その学びを生かしながら、利用者のペースにあった【コミュニケーション方法】を取り、入浴介助や食事介助時には個々の【利用者に適した援助方法】によるケアを学び、そして、ケア提供後は【自己のふり返し】を行っていた。学生は、利用者や職員の対応を観察しながら、利用者にとって通所介護の場が他者との交流や刺激を受ける場になっていることなどに気づき、高齢者や介護家族にとっての【通所介護の役割】について学んでいた。その役割を遂行するために、職員の役割分担の工夫などがなされている【通所介護の運営体制】について、そして、よりよいサービスを提供しようとする【通所介護の運営体制】が、通所介護の利用継続に繋がり、【通所介護の役割】が果たせることを学んだという学びの構造が認められた。

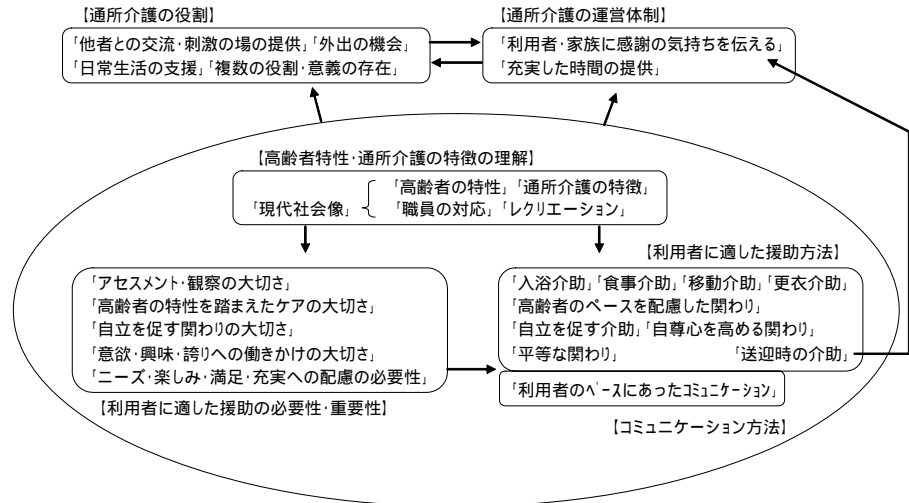


図2. 単独一般型の通所介護における学生の学びの関連図

聞き出す仕方のうまさや、思い思いに時間を過ごしている利用者の様子から「職員の対応」「通所介護の特徴」を学んでいた。学生は「高齢者の特性」の理解や「職員の対応」を通して、週1～2回という通所介護時の安全安楽なサービス提供には、利用者の身体状況などを迅速かつ的確な「アセスメント・観察が大切」であることを学んでいた。要支援～要介護3レベルの「高齢者の特性を踏まえたケアの大切さ」や「自立を促す関わりの大切さ」を学生は学び、「自立を促す介助」「高齢者のペースを配慮した関わり」や「利用者のペースにあったコミュニケーション」を取りながら、「入浴介助」「食事介助」「移動介助」「更衣介助」を行っていた。高齢者が大勢集う通所介護では「平等な関わり」が大切である。個々の高齢者との関わりのなかで、もてる力を引き出すために、「意欲・興味・誇りへの働きかけの大切さ」を踏まえた「自尊心を高める関わり」を行っていた。学生は1日の体験を通して、閉じこもり傾向になりやすい高齢者にとっての通所介護は「他者との交流・刺激の場の提供」「日常生活の支援」をし、「外出の機会」となっているなどの「複数の役割・意義の存在」があることを学んでいた。通所介護で一日過ごす高齢者にとって「充実した時間の提供」となるよう、「レクリエーション」は個々の利用者の「ニーズ・楽しみ・満足・充実への配慮の必要性」を考慮しながら行われ、「送迎時の介助」時には、次の利用に繋がるように「利用者・家族に感謝の気持ちを伝える」職員の対応を学んでいた。このように【通所介護の運営体制】と【通所介護の役割】は関連しているという学びの構造が認められた。

2) 一般型の通所介護における学び
一般型の通所介護では25サブカテゴリーの学びがみられた。主カテゴリー別にみると、一般型では【利用者に適した援助方法(28.6%)】が一番多く、次いで、【利用者に適した援助の必要性・重要性(19.6%)】【通所介護の役

2. 各通所介護の学生の学び

3タイプの通所介護ごとに取り出された学生の学びは、単独一般型78件、一般型56件、認知症型103件であり、各々1人あたりの記述は順に平均7.1件、5.6件、7.4件であった。

次に3タイプの通所介護ごとに学生の学びについて、以下に記述する。

1) 単独一般型の通所介護における学び

単独一般型の通所介護では26サブカテゴリーの学びがみられた。カテゴリー別にみると、【高齢者特性・通所介護の特徴の理解(29.5%)】が一番多く、次いで【利用者に適した援助方法(28.5%)】【通所介護の役割(17.9%)】【利用者に適した援助の必要性・重要性(12.8%)】であった。

単独一般型の通所介護における学生の学びとして取り出された26サブカテゴリーの関連性について検討した結果を示す(図2)。

学生は通所介護利用者の入浴介助や食事介助に職員とともに関わりながら、孤独感を感じる高齢者の存在を知り、高齢者と会話できない程の多忙な時代なのだとして「高齢者の特性」理解を通して「現代社会像」にまで広げて学んでいた。また、様々な利用者から職員が生活情報を

割(17.9%)】【通所介護の運営体制(12.5%)】であり、【高齢者特性・通所介護の特徴の理解(10.7%)】は他通所介護と比較して割合が低かった。

一般型の通所介護における学生の学びとして取り出された25サブカテゴリーの関連性について検討した結果を示す(図3)。

学生は通所介護利用者の入浴介助や食事介助に職員とともに関わりながら、高齢者の他者への思いやり、通所介護の落ちついた雰囲気等の「高齢者特性」「通所介護の特徴」を学んでいた。学生は「高齢者の特性」の理解や「職員の対応」を通して、週1~2回という通所介護時の安全安楽なサービス提供には、利用者の身体状況などを迅速かつ的確な「アセスメント・観察が大切」であることを学んでいた。さらに、重度の身体障害のある「高齢者の特性を踏まえたケアの大切さ」「生活背景など個性を活かした対応の大切さ」「在宅生活を踏まえた関わりの必要性」や「自立を促す関わりの大切さ」を学生は学び、「利用者のペースにあったコミュニケーション」を取りながら、「個性を尊重した関わり」や「高齢者のペースを配慮した関わり」を「入浴介助」「食事介助」「更衣介助」の場面で行っていた。特に、レクリエーション時の「職員の対応」の観察から、利用者の「意欲・興味・誇りへの働きかけの大切さ」を踏まえた「雰囲気づくり」「レクリエーション時の介助・工夫」が行われていることを学んでいた。このような利用者の様子や職員の対応から、通所介護は重度障害のある高齢者にとって「他者との交流・刺激の場の提供」「日常生活の支援」や「外出の機会」となっていることを学び、重度の身体障害のある高齢者をケアする上で、「職員の役割分担・配置の工夫」による効率性や安全性の確保、「同一職員による対応」による安心感への配慮がなされていることを学んでいた。また、利用者・家族にとっては「学生も職員の一員」で

ある。従って、学生も職員とともに、利用者が継続して通所できるように「充実した時間の提供」を行っていた。また、職員からは、送迎時に「利用者・家族に感謝の気持ちを伝える」対応方法を学んでいた。重度の身体障害のある高齢者が通所介護を利用することで「介護家族の負担軽減」にもなるのだという学びの構造が認められた。

3)認知症型の通所介護における学び

認知症型の通所介護では35サブカテゴリーの学びがみられた。主カテゴリー別にみると、【利用者に適した援助方法(35.0%)】が一番多く、次いで【高齢者特性・通所介護の特徴の理解(18.4%)】【利用者に適した援助の必要性・重要性(16.5%)】であった。

認知症型の通所介護における学生の学びとして取り出された35サブカテゴリーの関連性について検討した結果を示す(図4)。

学生は通所介護利用者の入浴介助や食事介助に職員とともに関わりながら、高齢者が土地の話に詳しいことや、通所介護の落ちついた雰囲気、一日の流れなどの「高齢者特性」「通所介護の特徴」を学んでいた。学生は「高齢者の特性」の理解や「職員の対応」を通して、週1~2回という通所介護時の安全安楽なサービス提供には、利用者の身体状況などを迅速かつ的確な「アセスメント・観察が大切」であることを学んでいた。さらに、認知症のある高齢者の「生活背景など個性を活かした対応の大切さ」「在宅生活を踏まえた関わりの必要性」「自立を促す関わりの大切さ」「意欲・興味・誇りへの働きかけの大切さ」を学生は学び、「利用者のペースにあったコミュニケーション」や「非言語的コミュニケーション」を取りながら、「高齢者のペースを配慮した関わり」「個性を尊重した関わり」「見守り」を「入浴介助」「食事介助」「移動介助」の場面で行っていた。高齢者が大勢集う通所介護では「平等な関わり」や個々との「信頼関係の構築」が大切であることや、認知症高齢者が落ち着けるような、ゆったりとした「雰囲気づくり」、認知症を考慮した「レクリエーション時の介助・工夫」が行われていることを学んでいた。また、学生は認知症をもつ高齢者との関わりから、「認知症高齢者の特性」を理解し、「認知症を考慮した対応の必要性」を生かした「認知症高齢者への介助」や「認知症高齢者とのコミュニケーション」方法を学んでいた。学生は利用者への援助を通して、「確認の大切さ・再考の必要性への気づき」「技術の未熟さから自己をふり返る」ことを行っていた。このような利用者

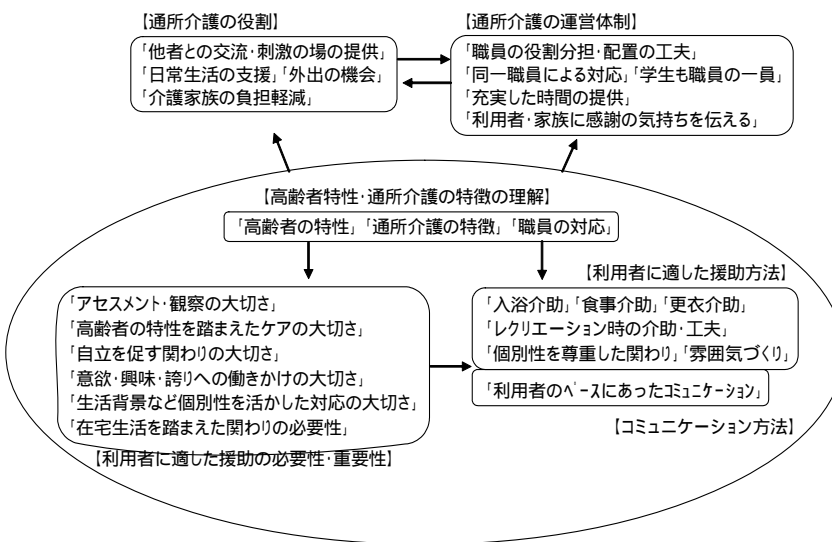


図3. 一般型の通所介護における学生の学びの関連図

の様子や職員の対応から、認知症高齢者にとって通所介護の利用は認知症の進行予防になる「他者との交流・刺激の場の提供」や「日常生活の支援」となっていることを学び、認知症高齢者をケアする上で、「職員の役割分担・配置の工夫」による効率性や安全性の確保がなされていることを学んでいた。また「送迎」時には、安全性に配慮した「送迎時の介助」が行われ、家族への介護方法の伝達や利用者に関する情報交換の機会として、また介護家族からの相談内容によっては「他職種との連携」が行われるという「送迎の効果的利用」がされていることを学んでいた。このように通所介護は「介護家族の負担軽減」にもなっているという学びの構造が認められた。

・考察

以上の結果から、学生が通所介護体験において学んだ主カテゴリーとサブカテゴリーが明らかになり、それぞれの学びの構造化ができた。今後の実習計画立案に役立てるという視点から考察する。

まず、共通する通所介護の学びとその構造について考察する。

1. 通所介護の学び

最も多い学びは【利用者に適した援助方法】31.2%であり、次は【高齢者特性・通所介護の特徴の理解】20.3%、【利用者に適した援助の必要性・重要性】16.0%であり、約2/3が対象の理解や通所介護での援助に関した学びであった。本研究と同様の学生の学びを分析した先行研究⁵⁻⁷⁾と比較したところ、【利用者に適した援助の必要性・重要性】の学びは本学の学生にしかみられなかった。これらの学びは1日間の実習であったにも関わらず、学生が職員の技術を観察しながら、既習の看護学教育によ

て学生が身につけた看護過程の思考過程を通所介護の体験の場でも展開していたためと思われる。医療の場のみならず、福祉の場でも高齢者を尊重した個別ケアを基盤とする学びの構造が伺え、本学の領域別実習における積み重ねの成果と思われる。

ある学生はレクリエーション時の利用者の笑顔や身体活動、安全性などに配慮した職員の動きを観察して【通所介護の役割】や【通所介護の運営体制】を学んでいた。通所介護での高齢者との関わりは、個人から高齢者を取りまく環境への学びの拡大になり、多角的理解に役立ったと思われる。

次に3タイプごとの通所介護における学生の学びと構造について考察する。

2. 単独一般型の通所介護における学び

単独一般型の通所介護における学びで多かったのは、【高齢者特性・通所介護の特徴の理解】29.5%であり、【利用者に適した援助方法】28.5%とあわせると半数以上を占めていた。単独一般型での実習を終了した学生から「高齢者との接し方がわかった」と報告を受けたことがあった。単独一般型の通所介護の利用者は要介護度が低く、コミュニケーションがとりやすい利用者が多い。学生の問いかけによって利用者の在宅生活や現在の思いなどを比較的容易に把握することができたことや、「入浴介助」「食事介助」「移動介助」「更衣介助」の際、職員とともに関わり易かったことが推測でき、他タイプの通所施設に比べると高齢者特性の理解が深まったと思われる。

「レクリエーション」の援助で、ずっと大人しかった方が大声を挙げて参加していた。ある方は障害が重い人にボールをとってあげていた。職員さんも一緒になって楽しんでいった。という学生の学びがあった。通所介護の機能¹¹⁾には活動性の向上や社会交流があげられる。要介護度の低い高齢者にとって通所介護が介護予防に役立っていることや、身体機能などの低下のある在宅高齢者から失われつつある社会性の再獲得の場となっていること、それらの機能が円滑に遂行されるような場の提供を職員が努力しながら行っている姿を単独一般型の通所介護で学んだと思われる。

機能¹¹⁾には活動性の向上や社会交流があげられる。要介護度の低い高齢者にとって通所介護が介護予防に役立っていることや、身体機能などの低下のある在宅高齢者から失われつつある社会性の再獲得の場となっていること、それらの機能が円滑に遂行されるような場の提供を職員が努力しながら行っている姿を単独一般型の通所介護で学んだと思われる。

3. 一般型の通所介護における学び

一般型の通所介護における学びで多かったのは、【利用者に適した援助方法】28.6%であ

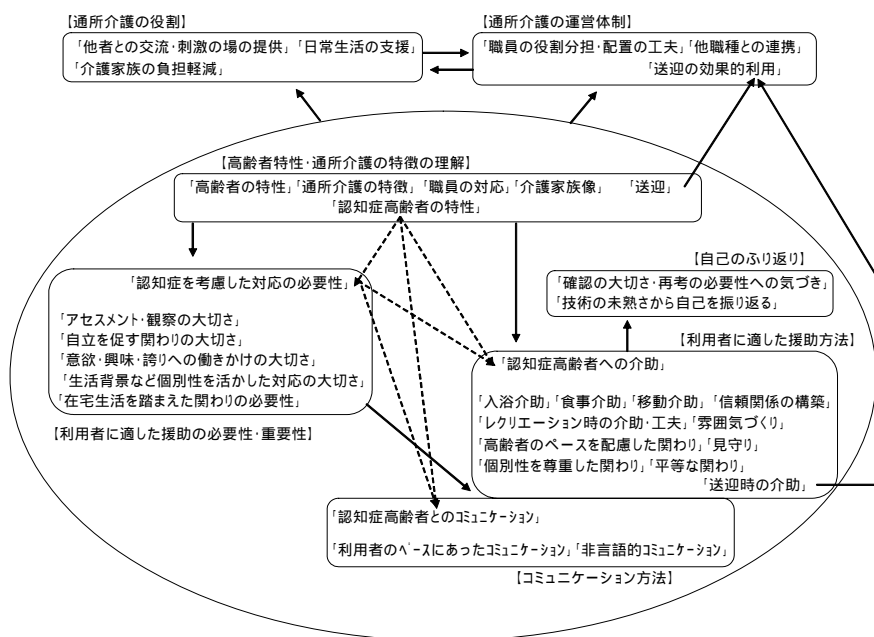


図4. 認知症型の通所介護における学生の学びの関連図

り、次いで【利用者に適した援助の必要性・重要性】19.6%、他の学びのカテゴリーも各10~18%の割合を占めていた。これは、前週の病棟における実習(脳神経外科病棟)での個別性や自立支援を踏まえた「入浴介助」「食事介助」などのケア提供や、面会時の家族との関わりから得た学びが生かされたと思われる。

【高齢者特性・通所介護の特徴の理解(10.7%)】は、単独一般型の通所介護より低かった。これは、意思疎通が図れる利用者が少なく、重度の身体障害者が中心であったため、利用者自らが率先して話しをするには至らず、学生の観察による高齢者特性の理解が学生の学びとなったと推測される。

4. 認知症型の通所介護における学び

認知症型の通所介護における学びは、【利用者に適した援助方法】35.0%が1/3以上占め、次いで【高齢者特性・通所介護の特徴の理解】18.4%、【利用者に適した援助の必要性・重要性】16.5%であった。他タイプの通所介護との学びの違いは、高齢者に関する学びに加えて、「認知症高齢者の特性」などの認知症高齢者に関する学びをしていたことである。また、環境については在宅にいるような部屋の設えで、とても落ちついた雰囲気でしたと学生は学んでいた。認知症による異常行動の静穏化という通所介護の機能¹¹⁾を施設環境からも学んでいたといえる。

「送迎」時、学生は職員と家族が利用者の情報交換を行っている場面を観察した。職員は家族から得た情報をその日の援助に生かしており、家族が利用者の違った一面や介護方法を知ることによって日々の介護に役立つようにと、職員は「送迎の効果的利用」を行っているとして学生は学んでいた。送迎は家族にとって介護の専門職と接触できる機会になる。利用者本人のみならず、家族をも含めた援助を在宅で行っていく際に、「他職種との連携」が有効であることも学んでいた。また、通所介護の役割の1つとして日中の介護からの解放という「介護家族の負担軽減」に繋がっていることに気づいていた。このように送迎への同行は家族に関する多くの学びが得られ、病院とは違った通所介護体験でしか学べない貴重な体験である。

以上のように、3タイプの通所介護体験による共通の学びは7カテゴリー、各通所介護の学びは25から35サブカテゴリーであった。これは、利用者の要介護度の違いによって、援助の必要性・重要性や方法が異なっていたことを学んだということの意味していると考えられる。そこで、今後の老人看護学実習では、2週間の老人看護学実習期間中に学生の学びに偏りが生じないように、病棟と介護老人福祉施設実習時の受持高齢者の特徴を考慮しながら、通所介護の対象を選定することも必要と思われる。また、通所介護実習では夕方の送迎まで体験するため、学生カンファレンスへの参加が出来ない学生もいた。学

生の送迎体験を朝のみとし、夕方は各通所介護の学びを共有するカンファレンスを行う必要があると考える。

高齢者看護は病院と施設に限られるものではない。最終日の学内カンファレンスにおいて、1週目の病棟における実習と2週目の介護老人福祉施設、通所介護実習での学びを生かして、高齢者の健康レベルにあった援助や高齢者を取り巻く家族への援助も含めて、地域における病院、施設、在宅という高齢者の生活の場での看護、並びにそれらを連続して捉える継続看護の必要性について学ばせていくことが重要だと思われる。

まとめ

本研究は、3タイプのいずれかの通所介護を1日体験した看護学生の学びを明らかにし、構造化して、今後の実習に役立てることを目的とした。研究に同意の得られた学生35名の実習レポートを分析した結果、以下のことが明らかになった。

1. 学生の学びは【高齢者特性・通所介護の特徴の理解】【利用者に適した援助の必要性・重要性】【コミュニケーション方法】【利用者に適した援助方法】【通所介護の役割】【通所介護の運営体制】【自己のふり返り】の7主カテゴリーであった。
2. 3タイプの各通所介護における学生の学びは、単独一般型26サブカテゴリー、一般型25サブカテゴリー、認知症型35サブカテゴリーであった。利用者の送迎場面において、学生は家族の介護負担軽減に貢献する通所介護の役割と意義を学びとっていた。

謝辞

本研究にあたり、調査にご協力して下さいました学生の方々に厚くお礼申し上げます。

文献

- 1) 安川揚子, 細谷智子他: 老人看護学実習における介護老人保健施設実習の一考察. 茨城県立医療大学紀要, 7, 171-179, 2002.
- 2) 久代和加子, 梶井文子他: 老年看護臨地実習の教育評価 介護療養型医療施設と介護老人保健施設で実施したことの意義についての検討. 聖路加看護大学紀要, 30, 97-103, 2004.
- 3) 小野幸子, 原敦子他: 高齢者ケア施設における看護学実習を通じて学生が表現した高齢者看護の見方・考え方 - ケースレポートより -. 岐阜県立看護大学紀要, 4(1), 99-104, 2004.
- 4) 水口陽子, 田中キミ子: 特別養護老人ホームにおける老人看護学実習の学習内容 - 実習記録の分析から -. 老年看護学, 5(1), 131-139, 2000.
- 5) 岡部充代, 佐藤敏子他: 通所サービス実習における

- 学習効果 . 三重看護学誌 , 5 , 65-74 , 2003 .
- 6) 水主千鶴子 : 通所施設(デイケアセンター・デイサービスセンター)における看護学生の学び . 和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要 , 6 , 77-83 , 2003 .
- 7) 原敦子 , 小野幸子他 : デイケアにおける看護学実習での学生の学び - 実習記録の分析より - . 岐阜県立看護大学紀要 , 4(1) , 85-91 , 2004 .
- 8) 新村出編 : 広辞苑 第5版 , 2522 , 岩波書店 , 東京 , 1998 .
- 9) 介護保険制度研究会監修 : 介護保険関係法令実務便覧 . 1001-1020 , 第一法規 , 東京 , 2005 .
- 10) 前掲書9) . 111-200 .
- 11) 竹内孝仁 : 通所ケア学 . 111-149 , 医歯薬出版 , 東京 , 1996 .

What Students Learned from One-Day Experiences at Elderly Day Care Facilities as a Component of Practical Training for Elderly Nursing - Analysis of Day Care Practical Training Reports -

Sayuri Tanaka Setsuko Ohta
Shiga University of Medical Science Faculty of Nursing

Abstract

The objective of this study was to clarify what nursing students learned during their one-day experiences in one of the three types of day care services provided at elderly care facilities. Subjects were 35 consenting nursing students who participated in order to improve their practical training for the future. Subjects written reports were analyzed using a qualitative inductive method. A total of 237 sentences, each with a single meaning (labels), were extracted as descriptions of what students learned and noticed. These labels were then categorized into the following seven major categories of learning: "Understanding the nature of day care services for the elderly", "The necessity and importance of providing appropriate assistance to users", "Communication", "Assistance methods suitable for users", "Roles of day care", "Operational systems for day care" and "Self-reflection". Each category contained 2 to 15 subcategories.

When the students observed that users were being dropped off and picked up, they learned the roles and significance of day care services, which contribute to reducing nursing-related stress in families.

Key words: day care services, practical training report, degree of required care, student learning